

那珂川町の文化財 XII

丸ノ口古墳群の発掘調査



表紙はイラストにつき実際とは異なります。

那珂川町の文化財 XII

丸ノ口古墳群の発掘調査

2003年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64-1

印刷：山崎印刷
福岡県筑紫郡那珂川町仲467

2003年

那珂川町教育委員会

はじめに

那珂川町は博多と佐賀県神埼を、あるいは前原と太宰府を結ぶ交通の要として古くから栄えたところで、それを物語るかのように、町内のいたるところに数多くの文化財が残されています。特に平野をとりまく丘陵上には、安徳大塚古墳などの大きな前方後円墳をはじめとする、たくさんの古墳がつくられています。その内、中学校建設に伴い、平成9年度より片縄山の山裾に広がる片縄山古墳群に含まれる丸ノ口古墳群、白石古墳群の発掘調査を行なったところ、貴重な装飾古墳が2基も発見されました。

今回はその装飾古墳を中心に、発掘調査を行った古墳を紹介します。この冊子をとおして、文化財をより身近なものにいただけたらと願っています。

丸ノ口古墳群、白石古墳群がつくられた時代

丸ノ口古墳群、白石古墳群がつくられた古墳時代とはどんな時代だったのでしょうか。古墳時代の始まりは、近畿地方を中心に古墳がつくられ始めた3世紀の末ごろで、大和政権が成立した時期と考えられています。この頃の古墳は、前方後円墳や前方後方墳とよばれる大型のもので、当時の王など限られた人しかつくることができませんでした。しかし4世紀後半になると、九州や東北地方でも有力な豪族が古墳をつくるようになり、那珂川町でも安徳大塚古墳や妙法寺2号墳が相次いでつくられます。このように古墳が広がっていく様子は、日本の国が大和地方を中心にだんだん一つの国としてまとまっていく過程を示していると考えられています。その後、丸ノ口古墳群、白石古墳群がつくられた6世紀に入ると、「磐井の乱」で代表されるように、全国各地で豪族の反乱がおこり、この時期を境に前方後円墳はつくられなくなったり、規模が縮小されたりしていきます。そしてこれに変わるかの様に「群集墳」といわれる小さな古墳が数多く密集してつくられるようになります。こういった現象が現れた理由として、有力豪族をとおして家族集団を支配していた中央政権が、直接小さな家族集団を支配するようになったことを示しており、有力豪族が力を失っていく過程を反映しているといえます。

このように、丸ノ口古墳群、白石古墳群がつくられた時代は、やがて迎える古代律令国家が生まれる母体が形成された時期といえるでしょう。



丸ノ口古墳群と白石古墳群

丸ノ口古墳群、白石古墳群は片縄山^{かたなわやま}の山裾^{やますそ}に広がる片縄山古墳群の一部で、さらに丸ノ口古墳群は七つの群にわかれ、白石古墳群は四つの群にわかれています。今回はその内の丸ノ口Ⅲ～Ⅵ群、白石Ⅰ～Ⅳ群の発掘調査を行いました。その結果、丸い形をした古墳（円墳^{えんぶん}）と、それら円墳の間につくられた小さな石室だけの古墳（小石室^{せうせきしつ}）が41基見つかりました。これらの古墳からはイヤリングなどの「装身具^{そうしんぐ}」、矢じりや刀などの「武器^{ぶき}」、馬につけた「馬具^{ばぐ}」のほか、たくさんの土器が出土しており、それらの出土品からこの古墳群は6世紀代につくられたことがわかりました。下の写真は丸ノ口Ⅴ・Ⅵ群、白石Ⅰ～Ⅳ群を北から撮影したもので、丘陵ごとにグループ（群）にわかれているのがわかります。



色々な出土品

土器

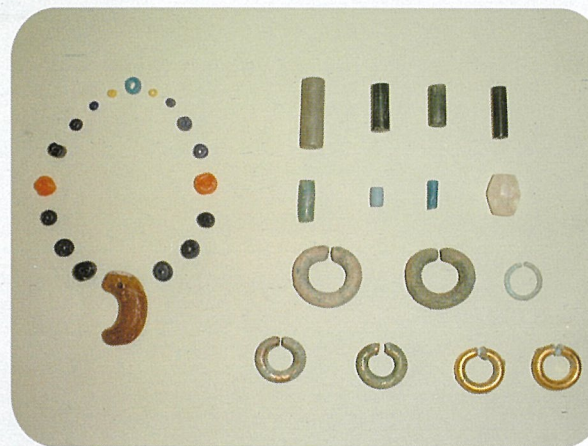
須恵器^{すえき}と呼ばれる灰色の土器が多く出土しています。写真はその一部に過ぎませんが、脚付壺^{きゃくつきつぼ}や高坏^{たかつき}、埴瓶^{ていへい}など用途に合わせていろんな形のものがあります。

下の写真は、古墳の入り口から土器がまとまって出土した様子です。



装身具

首飾りの部品になる勾玉^{まがたま}や丸玉^{まるたま}、イヤリングとして使われた金環^{じかん}が出土しています。右下の2つの金環はよく金箔^{きんぱく}が残っています。



武器

左の写真は刀^{はこ}で、長さは1mちかくあります。下は鉾^{とが}（右端）と矢じり^{やじり}で、矢じりは先が尖ったものや広がったものなど、いろんなかたちのものが出土しています。



馬具

轡^{くつわ}（右下）や馬鈴^{ばれい}、飾り金具などが出土しています。これらの出土品から、当時、古墳の主が馬に乗っていたことがわかります。

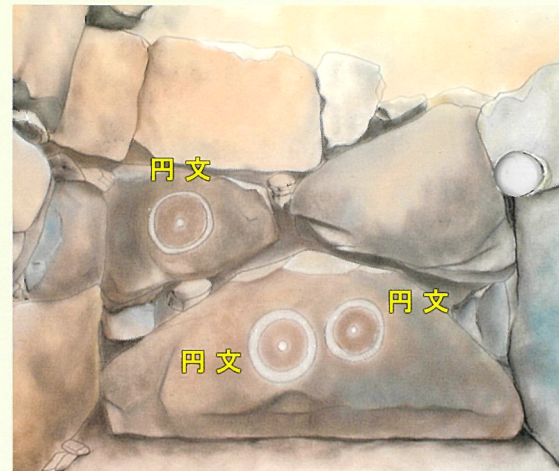
丸ノ口古墳群の装飾

装飾古墳とは、古墳の石室や石棺などに文様が描かれた古墳のことです。古墳の装飾は、外から見えない内部に行われるため、死者の霊を鎮めるために描かれたと言われています。丸ノ口支群で装飾が発見されたのはⅤ群5号墳とⅥ群2号墳です。では両古墳の装飾をのぞいてみましょう。

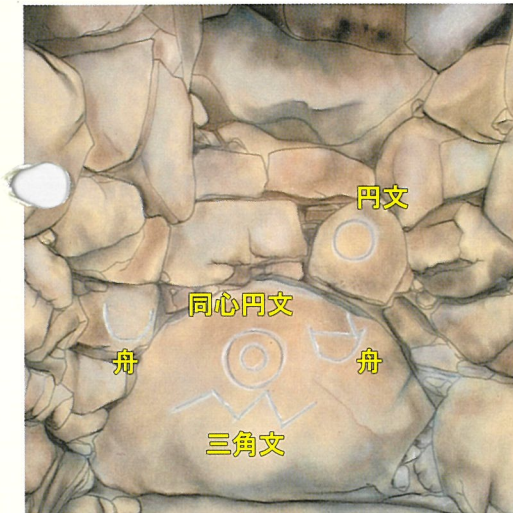
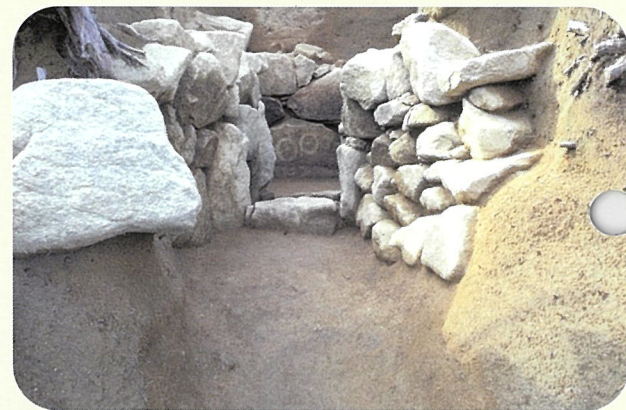


Ⅴ群5号墳の装飾

石室の奥の壁に直径約30cmの円文が3箇所描かれています。円文とは丸い形をした文様のことで、その意味としては「的」「太陽」「鏡」などをあらわしているものだと考えられています。2段目の石の文様は少し歪んで見えますが、特殊なカメラで撮影したところ、他の文様と同じようにきれいな円文であることがわかりました。



石室の入り口から装飾を見る



Ⅵ群2号墳の装飾

石室の奥の壁に直径約30cmの同心円文、約20cmの円文、舟をあらわす逆台形の文様と、その下にうっすらと三角の文様が描かれています。舟が描かれていることから、三角の文様は波を、同心円文は太陽をあらわしているのではないかと考えられます。また、横の壁にも舟をあらわす文様が描かれていました。これは、石室の中ではわかりませんでしたが、入り口から見ると奥の壁の舟と同じような形に見えます。



Ⅵ群2号墳調査後の様子



おわりに

最後に装飾古墳の丸ノ口Ⅴ群5号墳とⅥ群2号墳について簡単にまとめてみましょう。両古墳の装飾の一番大きな特徴としては、その装飾の方法が上げられます。文様をつける方法には赤や青などの絵具を使う彩色系のものと、線を刻んだり文様を浮き彫りにする彫刻系に大きく分かります。丸ノ口古墳群の装飾は彫刻系の装飾ですが、石の表面を突つくようにたたいて浅く窪ませ文様を表現する珍しい技法を用いています。この技法で装飾を行っている古墳は、筑後地方などで数例発見されていますが、一つの古墳群で2基同時に発掘調査されたのは丸ノ口古墳群が初めてです。また、当時の那珂川町と筑後地方のつながりを示す貴重な発見となりました。